
TRUE LEGEND

IRIS

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

TRUE LEGEND

【Nコード】

N4126P

【作者名】

IRIS

【あらすじ】

世に混乱をもたらす存在として、魔王が存在する。
魔王を倒す存在として、吟遊詩人達は『勇者』を夢想して街を歩く。
そして、その勇者は現れる。

幼い頃に旅立ったまま、少年の父は帰って来なかった。
しかし、父は沢山の手紙を寄越した。

「お父さんはフィンの王様から歓迎されたよ」

「明日にはランバートの川に着く予定です」

「みんなは元気かい？ 病気はしていないかい？」

最後に送られた手紙はこの一言で締めくくられていた。

「お父さんは明日、魔王城に向かいます」

父の仇を胸に、少年は魔王城を見上げる。
そこに、真実が待っているとは知らずに。

魔王城

空は、血のような赤と、闇色の雲が覆っている。湿り気を含んだ空気は生温く、じつとりと重い。死者の嘆きにも聞こえる風はねつとりと肌に絡みつき、酷く不快だ。

大地は瘴気に腐っている様にぬかるみ、歩く度に草や木の根、板切れや金属片などが絡まり、足を取られる。

小高い丘の上に、まるで一つの山とも思える程に巨大な城がある。朽ちた大地と違い、その城は建てられたばかりの様に美しい。

四人の戦士はようやく目的地に到着した。

ここは『魔王城』

アロンドイトⅡダルⅡレスターは、先頭を慎重に歩く。

ダイアⅡドレンサーはいつ敵が襲って来ても良い様に身構えながら歩く。

テレスⅡシンファアは恐怖に駆られながらも、いつでも呪文を唱えられる様に、呼吸を整える。

『サヴァン（賢者）』と呼ばれるハスターは、いつも通り、落ちて着いて最後尾を歩いている。

「静か過ぎじゃねえか？」

やがて、ダイヤが口を開いた。
体を守る鎧に刻まれた傷が、今までの旅の過酷さを物語っている。
女性でありながら、戦闘の際は誰よりも前に出て、果敢に魔物を倒す。

「気配はあるのに、攻撃する意志が感じられませんか」

小柄なハスターが続く。

二十半ばから『サヴァン（賢者）』と謳われ、三十を数えた現在、
三大賢者の一人に名を連ねている。

「どこも同じよ。大人しいのは最初だけ。後からみんな一斉に来るつもりなのよ……」

杖に縋るように、テレスはずっと強く握っている。

細く小さな体のどこに、そんな魔力があるのか不思議なくらいの
高い魔力で放つ魔法は、魔物を一気に吹き飛ばす。

「警戒するに越した事はない。ここは魔王城なんだからな」

まだ、少年と言えるアロنداイトの高い声は、凜として響く。

背中に背負った、装飾の美しい剣「ホーリー・オブ・ホワイト」
は罪のない者を傷つけられ、刃が黒くなると教えられた。

四人の足音は、薄暗い廊下に反響する事なく、闇に吸い込まれた。

アロنداイトは、今までの旅にあった出来事を思い返していた。

帰って来ない父の代わりとして、自分を育ててくれた祖父のレスター八世。

最初から一緒に居てくれたダイア。姉の様に、母の様に、師匠として、仲間として一緒に旅をして来た。

旅に出てすぐに、ファンジと出会った。いや、出会ったと言うよりは、ファンジのいた盗賊団にアロنداイト達が襲われたのだ。

仲間は足を怪我して動けなくなったファンジを見捨てて逃げた。アロنداイト達はそのファンジを介抱し、彼らの心に触れたファンジは感激してついて来た。

ファンジは、アロنداイトより年上だったが、どこか子供っぽく、ひょうきんで、彼がいると周囲は明るくなった。

魔法使いの街で、大切にされていた魔法の球を盗まれたとの噂を聞き、アロنداイト達はすぐに向かった。

魔法の球を探す道中で、一人、恐怖を押し殺しながら魔物の群れを倒すテレスに会った。

アロنداイト達が駆け付けると、安堵に気を失ってしまったが、目を覚ましてからは、持てる力を使ってアロنداイト達に協力した。塔の最上階で、魔物が魔法の球を壊そうとしていた所を倒し、無事に魔法の球を街に返した。

テレスはその後、アロنداイト達に着いて来た。

テレスのお陰で、戦闘は非常に楽になった。

時々、魔物からファンジがくすねたアイテムで魔力を回復させ、次々に強力な魔法を放った。

アロنداイトとダイアの技もメキメキ上達し、戦闘はいつも有利に進める事が出来た。

呪いの歌を歌う魔物がいると言う話を聞いて、四人はあの森を訪れた。

とても豊かな森で、虫達も動物も魔物も、穏やかに暮らしていた。ファンジは、その森を歩いている途中で突然倒れた。

高熱と幻覚に襲われ、テレスの回復魔法も効果を現さず、暴れる体をダイヤが押さえた。

そこに、魔物が現れた。

剣を抜くアロنداイトに、魔物は驚いたのか、持っていた果実を落として逃げた。

きつとファンジに呪いを掛けた魔物に違いないと、アロنداイトとダイヤは魔物を追った。

魔物は命ごいをした。

「ファンジを元に戻せば許してやる」

ダイヤの非難を背中に浴びながら、アロنداイトは言った。
魔物は言った。

「それは出来ない」

ファンジは、そのまま息を引き取った。

悲しみにくれる間もなく、三人は旅立った。

いくつかの事件を解決したが、三人の心にはファンジのいない悲しみがこびりついていた。

食事の度、量が少ないと騒ぐファンジが、ひどく懐かしく感じた。

アロンドイト達の噂を聞いてハスターが現れたのは、それから間もなくの事だった。

「あなたが、魔王討伐の為に世界を旅してるアロンドイト、で間違いないませんか？」

一人、町を歩いて居たところを呼ばれ、アロンドイトは驚いたのを覚えている。

サヴァン・ハスターの名を知らぬ者はいない。恐らくその頃のアロンドイト達よりも有名だっただろう。

ハスターに促されるまま、アロンドイトは今まであった事を洗いざらい話した。

アロンドイトが最後まで話し終わると、ハスターはしばらく考えた後、旅の同行を願い出た。

最初は断った。

『三大賢者を危険な旅に同行させる訳にいかない』

ハスターは静かに答えた。

「私は、君達とは別の理由で魔王に目的があるのだよ。私の仮説を確かめる為。なに、私も一人旅をする身、自分の身を守る位は出来るさ」

ハスターの同行を一番喜んだのは、同じ魔導の道を歩むテレスだ

った。

回復と補助を得意とするハスターのお陰で、旅は今まで以上に順調なものになった。

夜には、アロンドイトとダイアの訓練を見て、的確な指示を出し、二人の技は精度を増し、戦闘も最小限の体力でこなす事が出来た。テレスには、魔法の基礎から改めて見直させ、結果新たに強大な魔法を作り出すきっかけになった。

ハスターの旅の目的は何度聞いても、適当にはぐらかされた。

「この世の理に、この世の常識に、全ての理由があるのだよ」

そんな事を言う位だった。

そんなハスターが、ある日寄り道しようと言い、四人はとある泉にやって来た。

ハスターが魔法を唱えて、泉に入って行き、三人も着いて入って行くと、そこは精霊の世界の入り口だった。

精霊達に向かい入れられ、四人は精霊王に会った。

「主が、魔王を倒すと言う使命を帯びた人間か？」

精霊王には性別がなく、声には男性・女性両方の声質が混ざり合い、神々しく響いた。

「はい」

アロنداイトはきっぱりと、精霊王に飲まれる事なく答えた。

「主を育てたのは、祖父だったか？」

厳かに、精霊王は語る。

「はい」

決して臆する事なく、アロنداイトは答える。

「祖父の名、ランスロットだったな」

「はい」

精霊王は長い睫毛を伏せ、何かを考えた。

「主に剣を与えよう」

白く細い手を前に突き出すと、その手が光に包まれ、やがて一振りの剣が現れた。

「ホーリー・オブ・ホワイト」

アロنداイトが美しいその剣を抜くと、傷一つない美しい刀身に自分が映った。

「この剣は、罪無き者を救う為に生まれた。罪無き者を斬れば、刀身は黒く、暗黒に包まれるだろう」

アロنداイトは剣を鞘に納め、きっぱりと言った。

「私は罪のない者を救う為に旅をしています。この剣には、罪無き者の血を吸わせません」

精霊王はニコリと微笑んだ。

「主の曇り無き眼ならば、見定められる。旅に幸運を……」

エントランス（前書き）

長い長い廊下の先に、薄暗いエントランスが現れた。

遥か高い位置に、大きなシャンデリアがあるが、圧倒的な闇に押し潰され、その周辺しか照らしていない。

敷かれた絨毯が、四人の足音を消す。

規則正しく並ぶ柱に、荘厳な階段。

磨かれた窓と、飾られる美しい絵画。

天井絵は何かの神話をモチーフにしているらしいが、アロンダイト達は知らない。解るのは、その絵画の高い技術。渾身の力を籠めて描かれた絵だと言う事だ。

アロンダイトの城も立派な城だが、ここまで荘厳で洗練されていない。

だが、手摺りの装飾が今にも動き出しそうな、この暗黒の気配は、そんな感動を感じる隙を与えない。

エントランス

「しかし、静かだねえ」

退屈そうにダイヤが呟く。その声も、エントランスには響かない。

「ここまで静かなのも妙だな」

アロндаイトが続く。

暗さに慣れた目が、壁に飾られる絵に注がれる。

一人の男が剣を天にかざし、立っている。

「父上……」

自分がまだ幼い頃、父もここを訪れた。そして、帰って来なかった。

それでも、ここにたどり着くまで父の生還をどこかで信じていた。アロндаイトはほとんど父を覚えていない。

父の事は、母や祖父の話の中でしか知らないと言っても過言ではない。

「ふむ、素晴らしい絵だな」

ハスターが細い目で同じ絵画を見ていた。

「誰の作だろうな」

ハスターはカタンと絵を外し、手元でよく見る。

「コ…ボルト？」

「コボルト？」

二人は顔を見合わせ、サインを改めて見る。だがやはり見間違いない。

コボルトは体長一メートルほどの小さな人型の魔物だ。知力はあるものの、五・六歳の子供程度でしかない。つまりは、こんな繊細な絵を描けるはずがないと言う事だ。

「誰かがコボルトと書いただけかもしれないな」

ハスターは内心の動揺を隠す様に、絵を元に戻した。そんな二人の様子に気付いたダイアがずかずかとやって来た。

「何見てんだよ！　ここがどこか忘れたとは言わせねえぞ！」

叫び、絵に剣を突き立てる。ハスターが非常に不愉快そうな顔をしたが、すぐに穏やかな表情に戻った。

「敵の内情を知るのも、作戦を立てる上で重要な事だ。苛立つのも解るが、落ち着きなさい」

ダイアはチツと舌打ちをして、ドカツと座る。

テレスがビクビクしながらアロンダイト達に近寄ってきた。

「その絵に何かあったのですか？」

刺さった剣で絵は破れ、サインも読めなくなってしまっている。

「何でもない」

アロنداイトは素っ気なく言って剣を簡単に抜き、ダイアに投げ渡す。

と、テレスが鼻をひくつかせた。

「何か……良い匂いがしませんか？」

「ん？ ……本当だ。クリームシチューの匂いがする」

アロنداイトとダイアは半信半疑だったが、本当にシチューの香りがどこからともなく漂っていた。

「ハン！ 煮て食うつもりか！？」

ダイアが拳を叩く。

ハスターはそんな風には思えなかった。

「テレスはどう思いますか？ このクリームシチューに敵意を感じますか？」

問われたテレスは栗色のつぶらな瞳をしばたたかせ、よく匂いを嗅いでから答える。

「感じません。とても温かな気持ちになる香りです」

その時、タタタタタツと必死に走って来るような足音が聞こえて来た。

警戒に、隊陣を組み何が来ても対応出来るように構える。

アロنداイトはどんな魔物が現れるのかと、武者震いを剣を握っ

て抑える。

やがて現れたのは、コボルトだった。
呆氣に取られ、武者震いもどこへやら肩で息をするコボルトを見る。

やがてコボルトは息を整えて言葉を紡ぐ。

「申し訳ございません！ お迎えにあがる予定だったのですが……
大変遅くなり、心よりお詫び申し上げます！」

本来なら、ぼろ切れを身に纏えばまだマシ、言葉はなく鳴き声
しか思えない声を発している。

だが、目の前で深々と頭を下げるコボルトは、きちんとタキシ
ードを着込み、流暢な言葉を話す。

「魔王城にいる位だから、特別なコボルトかも知れません」

ギョツと杖を握り、警戒を緩めないテレス。

アロنداイトとディアはハツとして再び剣を構える。

ハスターはその横をスタスタ歩き、コボルトに近付いた。

「私達を向かえに来たとは、どういう事ですか？」

「ハスター！ 離れろ！」

ディアの声は無視された。

「魔王様は貴方様方を心よりお待ちしております。アロنداイト
様とディア様が旅を始めた時……いえ、もっと前から魔王様はお待
ちしておりました」

ハスターが何か言う前に、ダイアが怒鳴り声を上げた。

「何くっちゃべってんだよ！ ハスター！ お前裏切るつもりか！？」

その怒声にコボルトがビクリと体をすくませる。

ハスターがコボルトの肩を優しく叩き、振り向く。

「ダイア、少し落ち着きなさい。このコボルトに敵意は無い。それに、貴女の実力ならコボルト一匹、一撃で倒せる」

「そういう問題じゃねえだろ！？ 何コボルトに肩入れしてんだよ！」

ふう、とハスターはため息をついた。

「今まであたしらが何の為に旅して来たか忘れたとは言わせねえぞ！ 何人の人が魔物に殺された！？ 何人の人が魔物に家族を殺された！？ ハスター、忘れたとは言わせねえぞ！」

「ダイア」

剣を納めたアロンドイトが、ダイアの手を掴んだ。

「ハスターの言う通りだ。少し落ち着こう」

言ってアロンドイトは怯えるコボルトに目を向ける。

「話を聞かせて貰えないか？」

アロنداイトは動揺を押し殺していた。

『魔王が何年も自分を待っていた』

いくらでも自分達を殺せるタイミングはあったはずだ。だが、そんな事はせず、ただずつと監視しながら待っていた。

例えようのない恐怖も同時に押し殺していた。

「どういう事か、教えてくれ」

アロنداイトの言葉。ダイヤはチツと舌打ちをして、階段にドカッと座り、テレスはオロオロしつつも、アロنداイトの後ろにいた。

「私の口からは、多くを語れません。魔王様自らがお話をしたいとおっしゃっておりますので。ただ一つ。一つだけ私から申し上げたことがあります。魔王様は、貴方様方に危害を加えません」

コボルトは決められた台詞の様に、スラスラと語った。

考える様に、アロنداイトは形の良い唇に手を当てる。テレスはキョロキョロとコボルトとアロنداイトを交互に見つめ、やがて怖ず怖ずと口を開く。

「あの……魔王は、人々を支配するのが目的じゃないの……？」

コボルトは慎重に言葉を選ぶ様に答えた。

「魔王様は、世界を征服する事も、人々を掌握する事もしません」

しばしの沈黙が流れた。

アロنداイトは祖父に何度も言われた言葉を思い出していた。

『魔王は世界の人々を苦しめているんだよ』

『魔王はお前の父を殺した』

『魔王は強い。でも、誰かが倒さなきゃいけない』

『魔王は悪いやつだ。魔王は人間を殺して喜ぶようなやつなんだ』

幼い頃から、何度も何度も魔王はそういうものだと言われた。

「案内してもらおう。魔王の元へ」

沈黙の後、アロنداイトは重々しい口調でそう言った。

食堂（前書き）

赤い絨毯に、長いテーブルに、白いテーブルクロス。整列する椅子と燭台。

揺らめく火が、テーブルと花を照らす。

大きなシャンデリアは部屋を明るく、温かく照らし、壁に掲げられた印象派の絵画の芸術を高めている。

テーブルの上の湯気を上げる料理はそれに反して質素。

だが、その安らかさすら与える香りは、存在感において引けを取らず、客人を待っている。

食堂

アロنداイトは、その光景に言葉を失った。

今までの光景と余りに掛け離れ、思わず安堵してしまう空気に飲まれかけた。

軽く頭を振り、ここが魔王城だと言う事を改めて頭に刻む。

「魔王様。アロنداイト様方をご案内致しました」

コボルトが胸に手を当て、恭しく一礼した。

アロنداイトは柄に手を添え、コボルトが一礼した相手を睨む。

「あらあら、早いですね」

ゆったりとした穏やかな口調。肩で切り揃えた桃色の髪に、女性らしい曲線を描く細身の体。

「もう少しお待ち頂けますか？」

ニッコリと笑みを浮かべた顔の右頬に浮かぶ蝶の紋章。

「デメエが魔王だってか!？」

驚きにダイアが叫んだ。

女性は手に持っていた皿をテーブルに並べてから、また笑みを浮かべて答えた。

「はい、そうです。ですが、魔王ではなく、イリアと呼んで頂けま

すか？ 魔王では、恐ろしい印象しかありませんね」

クスクスと魔王……イリアは笑い、ディアは怒りに顔を赤く染めた。

「ふざけんじゃねえよ！」

アロンダイトの制止を振り切り、ディアはイリアの胸倉を掴んだ。

「テメエが魔王だってんなら、なんのつもりでこんな料理なんか用意してんだ！」

イリアは胸倉を掴まれたまま、嬉しそうな笑みを浮かべて答えた。

「みなさんとお話がしたいんです」

「はあ！？ 話だあ！？」

「ディア、落ち着きなさい」

ハスターが静かに制止する。不快感を露わにするディアだが、アロンダイトが無言で頷いたため、舌打ちをしてイリアを離れた。

ハスターはイリアに片膝を着き、頭を垂れた。

「仲間の無礼、お許し下さい」

「あらあら、そんな事しないで下さいよ」

イリアはしゃがみ、ハスターの肩に触れた。

「私はハスターさんもダイアさんとも対等になりたいんです。今はわざわざ来て頂いた私が歓迎してるんです。そんなにかしこまらな
いで下さい。ね？」

柔らかい口調と笑みは、相手の心を掴むのに十分な力を持っていた。

イリアはハスターを立たせ、席を進める。

「さあ、みなさんも座って下さい。私はパンを持って来るので少し席を外しますが、遠慮なく食べていて下さい。たくさん用意しまするので、たくさん食べて行って下さい」

ニコリと微笑み、頭を下げてイリアは調理場へ向かった。

テレスがアロنداイトの顔を見ると、まるで絶望するかの様な暗い顔をしていた。

「アロン？」

恐る恐る声をかけると、アロنداイトはゆっくりテレスを見た。

「少し、混乱してるんだ……」

右手で顔を覆い、頭を振る。

「あの人が、魔王だって……？」

料理を最初に口にしたのはハスターだった。
全員が席に着いたのを見て、躊躇う事なく、クリームシチューを

口にした。

「ハスター！ 毒でも入ってたらどうすんだよ！」

テーブルを叩き、ダイヤが怒鳴る。ハスターは味わう様にゆっくりとシチューを口に運び、飲み込んだ。

「とても美味しい……。人の気持ちを非常に温かな物にさせてくれる。そんな味だ」

思わず笑みを浮かべ、ハスターは言った。

アロنداイトとダイヤが躊躇う中、テレスが続いて口にした。

「わあ…… 本当に美味しいです。こんなに美味しいクリームシチュー、初めてです」

頬を赤く染め、テレスは夢中でシチューを口に運んだ。

「何日も丹念に煮込まないと、こんな味は出ません。ね、テレス？」

「はい、丁寧にじっくり、気持ちを込めたのがよく解ります」

「アロンもダイヤも…… 冷めてしまつては勿体ない。早く食べなさい」

二人に進められ、アロنداイトが恐る恐るシチューを口にする。

「…… 本当だ……」

驚愕の表情でシチューを見て、確かめる様にもう一口シチューを

口に運ぶ。

「ほら、ダイヤも」

「あたしはゴメンだね!」

腕を組み、ダイヤは不快感をあらわにそっぽを向いた。

香ばしい香りに、テレスが鼻をひくつかせた。

「お待たせしました」

イリアがバスケットにクロワッサンを乗せて運んで来た。
テーブルの中心に置き、フツと少し恥ずかしそうな笑みを浮かべ、空いていたアロンドイトの隣に座った。

「すみませんね。私もお腹が空いてしまって……パンは各自取って頂けますか？ 焼きたてですので、気をつけて下さいね」

言ってイリアはパンを一つ取り、シチューを口にした。

「では、遠慮なく頂きます」

ひょいとハスターもクロワッサンを一つ手に取り、熱さに苦戦しつつ半分に割ると、ふわりと湯気と香ばしい香りが立ち上った。

「これは、イリアさんがお作りに？」

ハスターが言うと、恥ずかしそうな顔をしながらイリアは頷いた。

「お料理本を見ながらですけどね。お口に合いましたか？」

「もちろんです。こんなに美味しいシチューは初めてですよ」

「本当ですか？ ありがとうございます。色々悩んだんですけど、結局自分の好きな物にしてしまっただけ」

嬉しそうにイリアは顔を綻ばせ、ハスターも笑みを浮かべてクロワッサンを口にした。

「これも素晴らしいです。イリアさんは料理がお上手ですね」

「ありがとうございます。今まで私一人しか食べた事がなかったの
で、自信が無かったんですよ」

和やかな空気を醸し出す二人にイラついたダイアがテーブルを蹴り上げた。

燭台と花瓶が倒れ、テーブルに火の手が上がった。

「ダイア！ なんて事を！」

批難するハスター。イリアは驚き、涙を目に溜めて火を消した。
アロンドイトとテレスもダイアに批難の眼差しを向け、ダイアの怒りを煽った。

「何とんだ！ コイツは魔王なんだぞ！？」

イリアを指差し、ダイアは叫ぶ。

「コイツのせいで何人の罪無き人が殺されたと思ってんだ！」

「ディア」

アロنداイトが口を開いた。

「今は話し合いの場だ」

「何が話し合いだ！ 何の為にあたし達は戦って来たんだ！」

「だから落ち着けと言ってるんだ！ 今までの事を無駄にしない為に！」

凜とした態度に、ディアはグツと言葉を失った。

「忘れた訳じゃない」

アロنداイトはディアに歩み寄り、近くに來てから耳打ちした。

「ディアの家族が魔物に殺された事。何よりも魔物が憎い事。忘れてはいない……でも、今は耐えて欲しい」

アロنداイトの言葉にギリツと奥歯を噛み締め、吐き捨てる様に言った。

「ああ、解ったよ」

ドカツと音すら立て、ディアは椅子に座った。

「すみません、イリアさん」

ハスターが、泣きそうになりながらテーブルを片付けているイリアに話かける。

「覚悟は、してましたから。私達は貴方達に酷い事をしていましたから……」

燃えたテーブルクロスを片付けていると、先程のコボルトが新しいテーブルクロスを持って来た。

「私も、取り乱してしまって……すみません」

ハスターがイリアを手伝ったのを見て、テレスも手伝いを始めた。

「いえ、貴女が謝るべきところではありませんから、謝らないで下さい」

テーブルクロスを広げ、ハスターは言った。

燭台や花瓶や食器を元の位置に戻し終え、再び全員が席についた。

「シチュー、美味しいですよ？」

ハスターが食べながらダイアにすすめる。

アロндаイトとテレスもシチューとクロワッサンを口にしていた。

「クロワッサンも美味しい」

アロндаイトが言い、チラリと見たダイアに、食べる様に視線を送った。

「このあたしが、まさか魔王の手料理を食べる羽目になるとはね！」

言つて、ディアは半ば自棄くそになりながらシチューを口にしたが、想像以上の美味しさに目を丸くした。

戸惑いつつも、ディアはシチューとクロワッサンを食べていた。

魔王は憎い。だが、この料理はそんな気持ちすら和らげてしまう程に、柔らかな味だった。

「……イリアさん」

「はい？」

ハスターの呼びかけに、イリアはニコリと笑つて答える。料理と同じく、柔らかな笑みだ。

「お話、とはなんでしょうか？」

気になっていたハスターは、場の空気が暗転しない事を祈りながら言った。

イリアは嬉しそうに微笑んだ。

「私は、人々がどの様に生きているのか知りたいんです」

意外な言葉に、一番反応したのはディアだった。

不快感をあらわにし、イリアを睨んだ。アロンドイトは視線でそれを咎め、口を開く。

「どういう意味だ？ 散々街を破壊し、人々の生活を奪つて来た者の言葉とは思えないが？」

刺のある言葉に、イリアは全く動じる事もなく、柔らかな笑みをアロنداイトに向ける。

「そう思つて当然です。私達、魔族・魔物は貴方達にたくさん危害を与えて来ましたから。私はその事に何の疑いも持たず、むしろどうすればもっと人を狩れるか考えていた位です」

イリアの告白に、ダイアは不愉快そうに、ハント、と鼻で笑いテールブルに足を乗せた。

「んで、その頭たる魔王様が、人間の何を聞きたいんだい？」

皮肉と刺を含んだ口調も、イリアは柔らかな笑みで受け止める。

「十五年前、一人の男性がこの城を訪れました……ええ、アロنداイト。貴方のお父様です」

アロنداイトは、堪え切れない憎しみと殺意をイリアに向けた。それでもイリアは柔らかな笑みを浮かべていた。

「貴方のお父様は偉大な方です。一緒にいた仲間も」

思い出す様に目を細め、イリアは語る。拳を握ったアロنداイトの手が震えているのは、気付いていた。

「貴方のお父様は、私に最初に言いました。『ここは寂しい所だ。貴女は寂しいと思わないのか？』と」

今にも爆発しそうなアロنداイトを、テレスが激情に震える手を

握って宥めた。

「それから、沢山お話をして下さいました。アロنداイト、貴方の事もして下さいましたよ？」『一番下のやんちゃ坊主だ』と言って笑っておられました」

イリアの口調はあくまで穏やかで柔らかい。が、それはアロنداイトの感情を逆なでしていた。

「私にとって、貴方のお父様と話をしている時間は、夢の様な感じがした。聞いた事のない話ばかりでした。人々の生活に根付く、風習や音楽、地を耕して植物を育て、冬に備える技術。食べられない物を食べられる様にし、更に火と道具を使い、いかに美味しく出来るか。その探究心と向上心に、私は心惹かれました」

ダンッ！

アロنداイトが激情に耐え切れず、拳を叩き付けた。

「貴様の口から父の話など聞きたくはない！ 貴様は父を殺したのだろう！？」

憎しみと殺意を纏った鋭い目は、悲しみを潜ませる柔らかい笑みに受け止められる。

ダイアはテーブルから足を下ろし、足元に置いた斧を掴んだ。

テレスはアロنداイトを落ち着かせ様と手を掴むが、乱暴に振り払われた。

「アロン。落ち着きなさい。イリアさんの話はまだ終わっていない」

ハスターは静かな口調でアロنداイトを制した。

「違います。違うんです」

イリアは目を閉じ、ゆっくりと首を横に振った。

「貴方のお父様に瀕死の重傷を負わせたのは、私達ではないんです」

「何を今更！ ならば何故、父は帰って来ないんだ！」

イリアは躊躇い、目を伏せて口ごもった。

「父を殺した奴から、父の話など聞きたくない！」

アロンダイトは再び叫んだ。

イリアは覚悟する様に唇を噛み締め、アロンダイトを見た。

「貴方には、真実を受け止める覚悟がありますか？」

その表情は真剣で、イリアの紫色の瞳がアロンダイトの黒い瞳を真っ向から見ていた。

「真実？ どう言う意味だ？」

アロンダイトは少しだけ嫌な予感を感じ、怒りの中に疑いを混ぜた。

「貴方のお父様とお祖父様……それから、貴方達が行って来た事の真実です」

イリアの瞳には、アロンダイトしか映っていない。

今にも襲い掛かりそうなダイアも、戸惑いキョロキョロしている

テレスも、冷静に成り行きを見ているハスターも映っていない。

「だからどういう意味だと聞いている」

思った返答が返って来ず、アロンドイトは苛立ちを募らせた。嫌な予感をこまかす為でもあった。

「私達、魔族・魔物は十五年前、貴方のお父様がこの城に来て、そして、言葉を交わしてから、私の命では人々を襲っていません」

イリアはきつぱりと言った。

「何を言ってる。レスター国はあの時から幾度と無く魔物の襲撃を受け、罪の無い人の命が大勢奪われた！ 貴様の命で無ければ、何故魔物はレスターを襲った！？ 何故ダイアの両親は死ななきやいけなかった！？」

バンツ！ と乱暴に机を叩き、アロンドイトは叫んだ。イリアは悲しそうに目を伏せて言った。

「私は、確かに貴方の国であるレスター国に魔物を派遣しました。でも、目的は襲撃ではありません。貴方のお父様のご存命と、対話を求めて派遣したのです。でも——」

アロンドイトを見つめる紫の瞳から涙が零れ、蝶の刻印を伝い、細い顎から雫となって落ちた。

「貴方のお祖父様——ランスロットは一切話を聞いてはくれませんでした。それどころか、派遣した私の部下を惨殺しました。国を襲ったと言う汚名を着せて……」

アロنداイトの握った拳から、血が滲んだ。綺麗に切られた爪が、剣を使い込んで厚くなった皮膚に食い込み、血を滲ませていた。

「でたらめをぬかすな！ レスター国王を侮辱するのか！？」

「でたらめではありません！」

イリアは悲鳴の様な声を上げた。睨み合う二人の間にハスターが入った。

「アロン落ち着きなさい。イリアさんの話を聞くんだ」

ハスターは低い声でアロنداイトをいさめる。

「こんなでたらめを黙って聞けと言うのか！？」

「アロン二度目だ。落ち着きなさい」

正面から見据えられ、激情に任せた姿をその目に反射させ、ハスターはアロنداイトをいさめた。

「……ハスターの旅の目的は、魔王に会う為……だったな」

思い出した様にアロنداイトは言う。

「ああ、そうだ」

ハスターは頷く。

「まさか、魔王の味方に着こうと……そのつもりだったのか？」

アロンはハスターにも敵意を向ける。

「この世の理に、世界の常識に、全てに理由はあるのだよ」

ハスターは旅の中、何度も口にした言葉を再び口にした。

「アロン、私は魔王と言う存在にある疑問を抱いていた。その疑問を抱く様になったのは、君のお父上が魔王城を訪れ、殺されたと言う噂を聞く様になってからだ」

ハスターの後ろで、イリアは噤り泣いている。

「私は、貴方のお父上に一度お会いした事がある。貴方の様に正義感が強く、真つすぐな男だった。お父上と貴方の違いは、お父上は非常に慈悲深かった。魔の者であっても、慈悲の心を持ち、戦意を失った相手に止めを刺す事はしなかった」

ハスターは敵意すら向けるアロنداイトに飲まれる事なく、言葉を紡ぐ。

「そのお父上が魔王と対峙し、お亡くなりになった。だが、その後から魔物達は弱体化した。オーガが著しいな。体格など昔の半分以下まで小さくなってしまった」

「それは魔王が父上との戦闘で重傷を負ったからだ」

アロنداイトの言葉に、ハスターは首を横に振った。

「イリアさんをご覧なさい。怪我などしてない」

ディアはハスターの言葉に拒否反応すら起こし、席を立て食堂を見て回っている。

「私は貴方のお父上の魔の者に対する態度と、魔物の弱体化に対し、一つの仮説を立てた。『魔王は、人々との敵対を望んでいない』とね」

ハッとして顔を上げるイリアを見て、ハスターは微笑む。

「貴女にお会いして、この仮説に確信が持てました。私はアロンのお父上の意志を継ぎ、人々との懸け橋になりましょう」

ハスターは片膝をつき、恭しく頭を下げた。

「そんな……裏切るのか？」

アロンドイトは言葉を失った。状況を理解出来ず、恭しく頭を垂れるハスターと嬉しそうなイリアを驚愕と絶望を混ぜた表情で見ている。

「裏切りではない。さっきからイリアさんも言ってるだろう。魔の者は人間との交流を望んでいる。貴方のお父上もそれを望んでいた」

ハスターの声は、静かで温かな食堂に響いた。ディアは怒りに身を震わせていた。

「魔物が人間との交流を望んでる？　ならなんで魔物は人間を襲うんだ？　そこを教えなよ。あたしの納得出来るようにな！」

石壁を殴り、憎しみを吐き出す様に言った。

イリアはしばし沈黙した。

「私達が、何故人々を襲うのか。そもその理由を、貴女は知っていますか？」

「ハン！ どーせ食うためだろ！？」

「そうです。人は沢山の食べ物をお腹で食べているため、他の生き物に比べてとても美味しいんです」

変わらない柔らかい口調で、さらりと言った言葉にテレスはギリと体を硬直させた。

「それに、人を食べるととても力がつくんですよ。ですから私達は好んで人を食べていました」

柔らかいイリアの口調と、その残酷な内容はちぐはぐで、ダイアの怒りを扇いだ。

「人間食って力つけてたテメエらが、なんで人間食うのを止めんだよ！ それじゃテメエらは弱るだけじゃねえのか！？」

「はい。その通りです」

ダイアの怒りすら包み込む様に、イリアは微笑む。

「でも、アロンのお父様は言われました。『人を食べて力がつくなら、人と同じ物を食べていれば、力が弱まるのを防げるんじゃないか？』と。なかなかオーガ達は料理と言う物を理解出来ず、みるみ

る弱くなつてしまいましたが……」

イリアは言葉を切り、手を叩いて先程のコボルトを呼ぶ。

「はい、ここに」

コボルトは食堂の隅で一礼し、返事をした。

「コボルト達は人と同じ食べ物を食べ、人の子と同じく教育を施しました。この子、言葉がとても上手でしょ？ 最初にアロンのお父様がお気づきになられ、言葉を教えたのですよ。本当に驚きました。だって、城の掃除をするしか役目の無かったコボルトが、私の執事を熟したり、素晴らしい絵を描いたり、他の魔物の子の世話をした……。今では、私達の社会には必要な存在になっています」

それに、と付け足してイリアは柔和な笑みを浮かべる。

「そもそも、私達が強くなくてはいけない理由ってなんだったかお解りですか？」

イリアの言葉の意味が解らず、ダイアは戸惑いに怪訝な顔をし、アロنداイトも眉をひそめた。テレスは考える様に首を傾げ、ハスターが答えた。

「敵対する私達人間の数が多かった……そうでしたね」

「はい、その通りです」

イリアは答えた後、思い出す様に目を閉じ、沈黙した。

「昔……遙か昔の話です。あんまりにも古くて、記録も途切れ途切れな位です。私達は人々と戦争をしました。長い長い戦争でした。人間は圧倒的な数で私達を襲い、私達は人間を凌駕する魔力で応戦しました。百年……位でしょね。長い戦争の末、私達はこの島に逃げ込み、一旦収縮しました」

大陸から離れた位置にある島は、行き来するにはかなりの労力を必要とし、結果的に魔族と人間を遮断した。

「長い戦争で負った傷は双方共に深く、そんな戦争があつた事すら忘れてしまう程の長い間——いえ、今もですね。ずっと対立しています」

意外な話にダイアは振り向いて話を聞いていた。テレスは戸惑い、何かを言おうと口を開くが、言葉にならない。アロンドイトは混乱のあまり、間抜けな表情をしていた。

ハスターだけはイリアの話を頷きながら聞いていた。

「貴方達を傷付けた罪を帳消しに、とは言いません。ですが、私はもう戦う事に意味を見いだせないんです。止めましょう？ 戦い続けても、無意味です」

それぞれの色を見せる八つの瞳を見ながら、イリアは紫色の目を優しげに細めた。

イリアはハスターから離れ、混乱に言葉を失っているアロンドイトに近付いた。

おそらく、この城に到着した時ならばイリアに切り掛かっただろうが、今のアロンドイトにはそんな気力はなく、近付いて来るイリアをただ呆と見ていた。

「私は、生まれながら高い魔力を持っています。属性は炎」

イリアは優雅に歩きながら言った。

「近づく者も高い魔力が無ければ、私の魔力によって燃えてしまいます。魔力の炎ですから、消えません。つまり……」

幼さの残るアロنداイトの顔に、イリアの細い指が触れる。

「貴方達以外の人間では、私に近づく事も、こうして触れる事も出来ません……それでも、封印を施してはいるんですよ？」

イリアの触れた部分が、少しだけ熱を持ち、アロنداイトの片頬が赤くなった。

「テメツ！」

「ダイア！」

その様子を見たダイアが怒鳴りかけ、ハスターが制した。

アロنداイトは赤くなった、熱い頬に触れ、辛そうな表情のイリアを見る。

「……信じて良いのか？」

「アロン！？ テメエ何言ってるのか解ってるのか！？」

アロنداイトの言葉に、ダイアは叫んだ。

ディアは肉親を奪われた憎しみを魔物達にぶつけて来た。停戦や調和となれば、その殺して来た魔物達とも手を繋がなくてはいい。

自分の肉親を奪った魔物と、自分が肉親を奪った魔物と、共生する事に激しい嫌悪感を感じていた。

「俺は……世界平和の為に戦って来た。世界平和の為に魔王を倒すと神に誓った」

アロنداイトの言葉を聞き、テレスは旅の途中、彼は幾度と無く教会で祈りを捧げていた事を思い出した。

何を祈っているのかと尋ねると、アロنداイトは『人々が安心して過ごせる世界を作ると神に誓っていた』と稟とした表情で言っていた。

「……アロン」

テレスは同じ表情でイリアと対峙しているアロنداイトを見る。

「俺は、知りたい」

テレスは稟としたアロنداイトの表情が好きだった。

正義も悪も、真っ直ぐに見つめ、立ち向かう姿が好きだった。

イリアは微笑む。

「着いて来て下さい」

とても、嬉しそうな微笑みだった。

アロنداイトは迷う事なく、身を翻すイリアに着いて行く。

「アロン！」

ディアは怒りに顔を赤くして、アロنداイトの肩を掴んだ。

「今まであたしらが何を目標にして来たのか忘れたっつーんじゃないだろうね！　魔王をぶっ倒す為だろ！？」

怒りの中に不安が見え隠れし、アロنداイトは静かにディアの手を離させる。

「俺の目標は、人々が安心して過ごせる世界を作る事。魔王を倒す事じゃなかった」

「なっ……！」

「ディア。君の魔物を憎む気持ちは、よく解っているつもりだ。でも、貴女の目標も同じだったはずだ」

アロنداイトの目は、愕然とするディアに真っ直ぐ向けられている。

「思い出して欲しい。最初、何と言った？　あの風の強い日に、レスター八世に何と誓いを立てた？」

ディアの脳裏に、剣を捧げて誓いを立てた時の光景が蘇った。そして、記憶の中のディアは言った。

『私、ダイアードレンサーは世界平和の為にこの身を投じます。この身、朽ち果てようと、世界の為に、神に捧げます』と――

書齋（前書き）

沢山の照明と大きな窓が部屋を明るく照らしていた。

古い本独特の湿り気を帯びた臭い、厚く積もった埃、擦り切れて文字の読めなくなった背表紙、誰かが読んでいたらしく、開いて置かれた本が数冊、綺麗に磨かれた机の上に乗っている。

書齋は食堂と比べ物にならない程広く、天井はエントランスと比べ物にならない程高い。

本が壁の代わりなのかと思う程に、隙間無く壁を覆い、それが本なのか認識出来ない程まで遠く、高いところまで古い本と新しい本が並んでいる。

書斎

大きな観音開きの扉を開け、イリアが書斎に入った。

先頭のアロンドイトは大量の本に圧倒され、言葉を失って立ち止まった。

立ち止まったアロンドイトの背中に顔をぶつけ、少し赤くなつた鼻を摩りながら、テレスは書斎を見る。

「わあ……。こんな沢山の本、見た事ないです……」

目を輝かせてそう言った。

ハスターはその言葉に反応し、硬直するアロンドイトの後ろから背伸びをして中を見た。

「これは……素晴らしい……」

古い本の匂いに目を輝かせ、アロンドイトを押し退けて中に入つて行く。テレスもハスターに着いて行き、中で待っていたイリアは喜ぶ二人を笑顔で向かい入れた。

「なんだいこりゃあ!？」

最後尾のディアは驚きに叫んだ。

「こんなに本があるところなんか見た事ないよ!」

驚きしかないディアに、アロンドイトは頷き、言った。

「世界中の本がここにあるみたいだ」

ダイアと同じくアロنداイトも、天井を探す様に見上げた。

一般的な民家なら、何件この書斎に入るのだろうか？

そんな考えが頭を過ぎった。

いや、民家程度じゃない。

フィンの様な小さな城ならば、この書斎に二つは入る。

「どうしました？」

入口で啞然と本を見上げる二人を見つけ、イリアは声をかける。

彼女にとってはこれが普通で、二人が驚くのは理解出来ないらしい。

「凄い蔵書だ」

アロنداイトはぶっきらぼうに言い、はしゃぐテレスとハスターの元に歩く。

「ありや良いつてモンじゃないだろ？ あんた、どこに何があるのか把握出来てんのかい？」

頭を掻きながら、ダイアは思わずイリアに言う。イリアは気を悪くした様子もなく、穏やかに紫の瞳を細めて微笑む。

「はい。一度は全部目を通していますから。それに、この本を管理しているのは私だけではありませんからね」

『一度は読んだ』と言う言葉に、ダイアは見えない天井と見えない壁を探し、何冊あるのかを考えてみるが、結局はよく解らず眉間にシワを寄せた。

「……んで、誰と管理してんだい？」

頭に痛みを感じ始めた辺りで、ダイアは気分を入れ替えようと言う。

イリアは言われて、本棚をコンコン、とノックする様に叩いた。

「魔王様、いかがなされましたか？」

どこからともなく低い声が響いて来て、ダイアとアロンドイトは思わず身構える。

「もしかして、ダンスツリーですか？」

テレスの言葉に、イリアは笑みで答える。

「この城が建てられてから、ここで本を守ってくれています。ご挨拶して下さいね」

本棚を優しく撫でて促すと、再び声が響いて来た。

「我輩はオラクル。魔王様の知識の源を預かる者である。読みたい本があるならば声をかけよ」

尊大な口調に、イリアはクスクス笑う。

「気にしないで下さいね？ こう言う話し方しか出来ないんですよ」

言いながら、目を丸くするアロنداイトとダイアを見て、おかし
そうにまた笑った。テレスとハスターも笑い始め、二人は少し恥ず
かしそうにしながら姿勢を直した。

「すっかり話が逸れましたね。この本ですよ」

イリアは言いながら、机の上に広げて置いてあった本を指した。
その本は、アロنداイト達の為に広げて置いておかれていたらし
く、朶も挟まれてる。

テレスとハスターと一緒に本を読み解き始める。

「これは、日記だな」

ポツリとハスターは呟き、テレスは眉間にシワを寄せる。
アロنداイト読んではみるが、古語は読み慣れていないので、ニ
ュアンスしか解らない。ダイアに至っては一瞬本を見ただけで、読
み解こうと言う気はなくなってしまうらしい。

「この年号がいつを示すのかは解らないが、恐らく十五年前。この
城にアレクサンダーと言う名の男がやって来た日の事が書かれてい
る」

名前を聞いたアロنداイトの顔色が変わった。アレクサンダーは、
アロنداイトの父親の名前だった。

「何と書かれているんだ？」

そう枯れた声でアロنداイトは先を促す。期待、不安、希望、絶
望……。様々な感情が入り混じり、表情は硬く強張っている。

ハスターは慎重に言葉を選び、アロنداイトに伝える。

「アレクサンダーがここに来たのは、話し合いが目的だったらしい。武器はおろか、防具も身に着けず、両手を上げて城に来た」

想像していた事と違う話に、アロنداイトとダイアは眉を潜める。テレスは先が読めなくなったらしく、日記から目を反らした。ハスターは何度も何度も読み返してから、慎重に言葉を紡ぐ。

「丸腰のアレクサンダーは、イリアさんの元に案内され、名を名乗る前に言った。『この城は寂しい。貴女は寂しくないのか？』」

イリアが語った言葉と一緒に言葉が、そこにも示されていた。

「文化言う物のさしてない魔の者に対し、アレクサンダーは歌を歌い、踊りを見せ、漫談などをして笑わせた。初めて見る物に、魔の者は強い興味を示し、いつしかアレクサンダーの周りに集まり始めた」

ハスターとダイアの目にはそれが思い浮かぶらしく、思わず頷いている。

「人間と触れ合えばもつと素晴らしい物が見れる。争いを止めて、手を取り合わないだろうか？アレクサンダーはそう提案した」

アロنداイトの顔を伺う様にハスターは言葉を切る。ダイアもそれを察知してアロنداイト見る。

俯き、震える手を拳握る事で誤魔化して居るアロنداイトの顔を覗き込む事は出来なかった。

「続けてくれ」

ハスターはアロنداイトをチラチラと見ながら日記を読み解く。

「文化に興味はあったが、人間と交流を行う事に魔の者は躊躇いを感じた。アレクサンダーは会議にも参加し、非難を受けながらも説得を繰り返した。同じ世界に住む者同士、手を取り合って生きて行こう、と」

イリアの語った事と変わらない内容に、ディアはテレスの行動に疑問を感じる。

先程聞いた物なのにそこまで動揺すると言うのは、どう言う事だろう？ と。

ページをめくったハスターは小さく悲鳴を上げ、前のページに戻って確認してまたそのページへ戻る。

「……アレクサンダーと仲間達は、根気強く説得を試みた。実力で排除しようと言う者も現れ、何度も重傷を負ったが、それでもまた丸腰で城にやって来た」

ハスターの顔は青く、声も僅かに震え、アロنداイトとディアに不安をもたらせる。イリアの表情は変わらず、ニコニコと朗らかなままだ。

「一週間に及ぶ説得の末、イリアさん含め、魔の者達は人と交流を持つ事に納得した。アレクサンダーはここでやっと自分がレスター国の王族であると名乗ったらしい」

はぁ、と息を吐き、ハスターは気持ちを落ち着かせる様に二・三回深呼吸する。

「この時点ですっかりアレクサンダー達を受け入れていた真の者達は、身分が高い事もさして気にはならなかったらしい。むしろ、人々の説得の為にはその方が好都合だと喜んだ位らしい」

ふう、と気持ちを鎮めるようにハスターは息を吐く。辛そうなハスターを見兼ね、イリアが声をかける。

「私が読みましょうか？」

心配する様な面持ちのイリアを見て、ハスターは首を横に振る。

「大丈夫です。アレクサンダーがここで何をしたのかを、アロンダイトに聞かせるのは私の仕事なのだろう」

ハスターの答えにイリアは小さく頷く。

ハスターは日記に目を落とし、読み解きを再開する。

「魔の者達はイリアさんの命令に速座に従い、捉えていた人々を解放した。中には従わない者もいたが、イリアさんの再度の命令に従わない訳にはいかず、全ての人々が解放された」

聞いていたディアが反応した。

「そんな話、聴いた事ないよ。それを聞く限りじゃ、随分いた様だけどさ」

「そうだな。レスターにもそんな報告は来ていない」

首を傾げるディアとアロンダイトに、ハスターは無視をして先を

読み始めた。

「次に、イリアさんに封印を施す事を提案した。アレクサンダー達があつた時の状態では、魔族並みに強い魔力の持ち主でなければ、触れるだけで燃えてしまう。それでは人々と会話もできず、文化に触れる事も出来ない」

アロンドイトは無意識に先程イリアが触れて赤くなつた頬を触つた。もう赤みも熱さも無いが、じわじわと炙られる様な熱さはハッキリ思い出せる。

あれ程の魔力で封印を施しているとは、信じられない。

「イリアさんは快諾し、封印を喜んで受けた。それでも魔力は強過ぎて、城の中でしか効果を發揮出来ず、強い魔力の持ち主でなければ触れた瞬間に酷い火傷を負わせてしまう。それでも、言葉を交わす事は出来る、とイリアさんは喜んだ」

その時の事を思い出したか、イリアの表情は嬉しそうな物になった。

「魔の者側の準備が整い、アレクサンダー達はレスター八世、ランロットに報告に行こうと、城を出て行った。イリアさんは同行出来ないが、代わりに魔族であるサタンを一人同行させた」

ハスターはページをめくり、ざっと読んで次のページに行く。何も言わず、次のページをめくる。

「……ハスター？」

話そうとしない彼を疑問に思い、アロンドイトが声をかける。

「あ、ああ。アレクサンダーが城を出て行ってしまってから、イリアさんはコボルトに教育を施し、魔の者達に料理を教え、ある者には絵画、ある者には音楽、芝居、カラクリなど、見よう見真似の文化を築いて行った、と言う内容なのだよ。アレクサンダーに関する事と言えば、便りがない事を心配する事くらいだ」

「城を出て行ってから、ずっとそうなのか？」

「そうだ」

アロンドイトと言葉を交わしながらページをめくっていたハスターの手が止まった。

じっくりとページを見ているハスターに、アロンドイトとダイヤは見ている事しか出来ない。先が気になるが、テレスが早々に目をそらしてしまった事に重大さを感じているので、ハスターとは言え、慎重に言葉を選んでいるのは解った。

「アレクサンダーに同行していたサタンが戻って来た」

唐突に、ハスターは言った。

「酷い怪我をして、助けを求めて戻って来た」

掠れた声で言った。

「何度も手紙や伝言を送ったのだが、一向に返事のない事を気にしながら、旅をしていたアレクサンダー達は、サタンを庇いながら、各地の王達と話をしながらついにレスターに戻った」

アロنداイトは王達に会って来たが、そんな話は聞いた事がなく、疑問を感じる。

「城に着いてすぐ、アレクサンダー達は牢に入れられた。戻って来るまでに幾度となくされていたので、誰もさして驚かなかった」

アロنداイトは、それがいつの事なのだろうか、と考える。魔王城へ行くと言ってから、ふつりと途切れた手紙。てっきり魔王城から出てこれなくなった、そこで命を落としたと思っていた父は、世界を思い、魔王を説得して信頼を得ていた。ならば、なぜ父は魔王城で命を落としたと伝えられているのか、なぜレスターに戻って来た事を教えてくれなかったのか。

アロنداイトは浮かび上がる疑問に、足元から崩れていくような不安を感じ始めている。

アロنداイトの小柄な体が震え始め、ダイヤが心配そうな顔をする。ハスターは息苦しさを紛らわせる様に深呼吸をする。

「アレクサンダーはランスロットに必死に訴えたが、魔の者に魅入られたのだと、聞く耳を持たれなかった。各国から届いていた報告には、アレクサンダー達とサタンに対する恐怖しか綴られていなかった。彼らが力を振るえば、街は消し飛んでしまう、それを回避するには、従うしかない、と」

ハスターの顔は青ざめ、唇は小刻みに震えていた。ダイヤも言葉を失い、アロنداイトは魔王であるイリアを信用しきつてはいけない、と自分に言い聞かせて自分を保っていた。

「ランスロットは、アレクサンダーの言葉を全く聞かなかった。戯言だと、取り合わなかった。アレクサンダーは無力感にやがて口を

閉ざす様になり、サタンは見兼ねて脱出を提案した。アレクサンダーは国に盾つけない、と拒否したが『処刑』という言葉聞いて、サタンは無理矢理にアレクサンダー達を連れて脱出した」

父の無念を思い、アロنداイトの目から涙が零れた。信じたくはない。だが、そこに書かれている父の姿は、あまりにも世間から見放されている物だった。良かれと思った事が全て裏目に出ている。まるで、誰かがそうし向けた様に。

「アレクサンダー達を連れてサタンは魔の者の手を借りながら魔王城を目指した。ランスロットはそんな一行を捕らえ様と兵を放った。人々を傷付けたくないアレクサンダーは兵達に攻撃されようと、攻撃する事はしなかった」

アロنداイトは、次々と兵が出陣して行った時期を知っていた。あの時、祖父のランスロットは何と言っただろうか？ 母は？ 兄は？ 思うが思い出してはいけない予感に、無意識に考える事を拒絶する

「仲間が囚われ、処刑されて行く中、アレクサンダーは己の無力さを呪った。実父であるランスロットを裏切ってしまったと、己を責め、レスターに戻りたいとサタンに懇願した」

テレスは本棚の向こうで嘸り泣き、イリアが宥めに向かった。ダイアはもう、どうして良いのか解らず、全身の力が抜けて椅子にもたれ掛かっている。

「サタンはアレクサンダーの身を案じ、レスターには――人間達の世界から遠ざける様に逃げ続けた。アレクサンダーはそれに気づく事もない程に弱り果て、サタン一人ではどうにもならない程になつて行つた」

ハスターはもう、日記に書かれている通りに読んでいる。誤魔化しも、遠回しな表現も使わない。アレクサンダーが歩んだ道を、息子であるアロンダイトに伝えていた。

「……嘘だ。デタラメだ！」

アロンダイトは氣力を振り絞る様に叫んだ。年相応の子供がみせる様な、駄々をこねるような叫びだ。

「お爺様はそんな事、一言も言わなかった！ 父は魔王に殺された！ それは変わらない事実だ！それが全てだ！」

アロンダイトの叫びに応える者はいない。

彼らは理解していた。

『イリアの綴った日記が真実だ』と。

アロンダイトの叫びに耳を貸さず、ハスターは日記を読み続ける。

「サタンが城にたどり着いた時、アレクサンダーは虫の息だった。兵に追われ、攻撃を受け、海に落ち、命からがらサタンが引き上げたが、回復を待つ事が出来ない程の怪我に、サタンは持てる力の全てを使って魔王城にアレクサンダーを運びこんだ。イリアさんの姿を見て、サタンは意識を失った」

「聞きたくない！ そんなデタラメ！ 兵が束になった所で、サタンに傷などつけられないはずだ！」

アロンダイトは耳を塞ぎ、頭を抱える様に叫んだ。父を死の淵に追いやったのが人間だと、亡き父に代わって育ててくれた祖父だと

信じたくなかった。

「アロン、精霊王はなんと仰ってホーリー・オブ・ホワイトを授けた？」

ハスターは日記から目を離し、激しく動揺するアロンダイトに問いかけた。背負った装飾も美しい白い剣を見て、アロンダイトは思ひ出す。

「この剣は、罪無き者を救う為に生まれた。罪無き者を斬れば、刀身は黒く、暗黒に包まれるだろう」

その言葉は、スルリと滑る様に出た。

「違う、その前だ」

ハスターは首を横に振る。アロンダイトは意図が読めず、ハスターを見る。

「祖父の名はランスロットだったな？ そう仰ったはずだ」

戸惑うアロンダイトにハスターは続ける。

「アロン、この先の真実を知りたいか？」

その言葉は重く、アロンダイトにのしかかった。

ハスターは何もかもを知ってアロンダイトとの旅に同行した。

『全ての事柄には理由があるのだよ』そう言って事をはぐらかす事も随分あった。それは、アロンダイトと違う視点に立って物事を見ている事を伺えた。

ハスターは、その違う視点に立つ覚悟はあるのか？ そうアロンドイトに問いかけていた。

「……少し、考えさせてくれ」

アロンドイトは掠れた声で呟く様に言った。

ハスターは息を吐き、日記を閉じた。ショックに呆然と天井をみているダイアを見て、落ち着いて来たテレスの傍にいるイリアに言った。

「イリアさん。『彼』に会わせては頂けないでしょうか？」

ハスターの言葉に、イリアは紫の瞳を伏せる。

「最初は、アロンドイトさんにしてあげたいんです。すみません」

「いいえ。謝らないで下さい」

イリアに軽く頭を下げた後、ハスターは書斎から出て行った。

テレスは打ちのめされているアロンドイトを見つめる。

椅子に深く座り、重くのしかかった言葉に負ける様に俯き、ピクリとも動かない。

「アロン……」

テレスは心配で呟く。

旅の中で幾度と困難な事があった。それでもアロンドイトは拳を握り、仲間を励ましながら前を向いて歩いていた。ファンジが死んだ時も、最初に立ち上がったのはアロンドイトだった。無言で立ち上がり、言葉少なにテレスとダイアに声を掛け、暮れて来た夕陽の

光を浴び、黙々と、それでも前を向いて歩いていた。
そのアロンドイトが言葉も出ない程に打ちのめされ、項垂れている。

「イリアさん」

「はい？」

魔王を倒すと誓い、長い旅に出た。その魔王は争いを止めて手を繋ごう、互いの発展を目指そうと提案して来た。

その理由は、アロンドイトの復讐心の根源であるアレクサンダーが説得し続けていたから。魔王に殺されたと言われていたアレクサンダーは祖国の兵に追われ、瀕死の状態でこの城に逃げ込んだ。

聞かされていた事と全く逆の事が真実だと突きつけられ、なすベき事を完全に見失って居る。

「私達を憎いとは思わなかったんですか？」

テレスは呆然としながら言った。

「一度も思いませんでした。むしろ、悲しいなと思いました」

「そう……ですか……」

その会話の後、誰も言葉を発さなくなった。突きつけられた真実は、思考を止めてしまう程に衝撃的だった。

イリアはこうなる事を予測していた。だが、アロンドイト達を信じたから、真実を見せることが出来た。旅の過程で犯した罪も、イリア達は流して来た。アレクサンダーの息子だからと、自分達と

人間の架け橋になってくれると信じていた。それは今、この瞬間も変わらない。

イリアは泣き止んでアロンダイトを心配そうに見ているテレスの手を軽く握る。

「テレスさんは、世界が平和になったら何かやりたい事がありますか？」

イリアの細い声は静かに、染み込む様に書斎に響く。テレスは意外な問いかけに眼をパチクリさせた後、答えた。

「私は、孤児なんです。臍の緒が付いたまま、道ばたに捨てられていました。十歳の時に魔導の道に歩む事を決めるまで、孤児院で過ごしていて、そこで沢山の子供達と一緒に生活していて、とっても楽しかったんです」

テレスの声は、僅かながら明るい色を宿し始める。将来についての話は、旅の中でも幾度となくして来た。

アロンダイト達はお互いの夢を知っている。何故その夢を描いたのかも。

「世の中には、私と同じ孤児が沢山いるんです。平和になったからと言って、いなくなるという訳でもないですから、私は世界が平和になって、魔導の力が必要なくなったら、孤児院を開きたいんです。子供達の笑顔で溢れていて、毎日毎日騒がしくて、忙しくて、それでも子供達の笑顔を見てまた頑張れる。そんな生活を送りたいんです」

テレスの浮かべた笑みに応える様にイリアも微笑む。

「良い夢ですね。私もコボルト達に教育を施している時はそうでしたよ。騒がしくて大変でしたけど、充実した毎日でした。コボルト達の成長を見るのはとても楽しかったです」

イリアは言つて、ショックから大分立ち直っているダイアに目を向ける。

「ダイアさんは？」

日記の内容を聞いてしまった今、先程まで持っていた復讐心は半減し、ダイアはイリアに戸惑いの表情を浮かべながら言つた。

「あたしは…… 武術の腕を上げたいね。平和になった世界にや必要ないつてのは解るけど、あたしは当たり前前の家庭に入つて生活するつてのは考えられなくてね」

照れる様に、困る様に、ダイアは腕を組んだり頭を掻いたりしながら言つた。

「んでもつて、旅する元気も無くなったら、弟子でもとつて死ぬまで武術に携わつていたいもんだね」

ダイアの答えに、イリアはクスクスと笑う。

「良い夢ですね。次の代に何かを残す事を考えているなんて、素晴らしいです」

イリアは言い、アロンドイトに視線を向ける。気づいたアロンドイトは嫌がる様に視線を逸らした。

「…… 実は、あなた達の夢が何か知っていました」

イリアは悪戯っぽく笑う。テレスはキョトンとし、ダイアは開けっぴろげなイリアに半ば呆れる様な顔をする。

「アロンダイトさん」

名を呼ばれ、アロンダイトは顔を上げてイリアを見る。ニコニコと笑っている表情に、自然と緊張が解れていく。

「改めて、アロンダイトさんに尋ねてもよろしいですか？」

イリアの言葉に、アロンダイトは再び俯く。

「聞かせて頂けますか？ 世界が平和になったら、何をしたいのか」

アロンダイトは言葉に困り、ただ無言で俯く。
イリアは知っている。

将来について話をしている時、アロンダイトだけは話に参加していなかった。それは『魔王を倒す』と言う大きな目標に集中する為にあえて考えていない、とアロンダイトは語っていた。

「……俺は、三男だ。王位には就けないだろう」

俯き、ポツリとアロンダイトは言った。ダイアとテレスは黙って様子を見ている。

「俺は、物心つく前から魔王を倒す事を目標に、日々鍛錬をして来た。兄達のように政治については全く知識がない」

本当に何も考えていなかったアロンダイトは、冷静に自分の置かれた状況を確認しようと口に出す。

「魔王を倒して、世界が平和になって、レスターに戻っても、兄達の補佐は出来ないだろう。武術以外、俺何もは学んでいないのだから」

居場所が無いように思え、アロンドイトは急に不安に襲われる。

「旅をしている時も、ここに来てその日記を読むまでこんな気持ちにはならなかった！ 父上を殺した魔王を倒せば世界が平和になると信じて来た魔王が、こんな、こんな……」

不安に、アロンドイトの双眸から涙が溢れる。肩書きを剥ぎ取られた、まだまだ子供な顔が露出し、ダイヤは意外そうな顔をしてから、心配そうな顔をする。

「俺は何の為に戦って来たんだ？ みんなは俺に真実を語らなかった。母上も、お爺様も」

膝の上に置かれた拳に涙が落ち、アロンドイトは慌てて乱暴に顔を拭いた。

「俺は――」

言いかけたアロンドイトは、人の気配に振り向く。ハスターは四人の雰囲気が変わっている事に気づき、居辛そうに苦笑いを浮かべる。

「お邪魔だったかな？」

「いえいえ、そんな事はありませんよ」

イリアは微笑み、ハスターに席を勧める。

「今、みなさんに夢を聞かせていただいたところなんですよ」

「夢を？」

それだけで事情を察したハスターはアロンドイトに視線を送りながら椅子に座る。

「それならば、私も語らなくてはいいけませんね」

ハスターは笑い、溢れる涙を必死に堪えているアロンドイトを見ながら言う。

「私の夢は世界の驚異を見て回る事です。ガルレアの登り滝や、ロビングットの瞳、紅色の湖、それにランバートの川。話には聞いても見た事の無い驚異、人々の知らない驚異は世界に溢れています」

ハスターの話に、イリアは目を細める。羨ましそうな、そんな表情だ。

「もし見て来たら、私にも聞かせて頂けますか？」

「ええ、もちろんです」

ハスターも笑い、答える。ここに至るまでの旅の中でも、ハスターの寄り道は多かった。それでもそれらは貴重な体験ばかりだったので、三人に不満は無かった。

ハスターとイリアがひとしきり笑い、自然と四人の視線はアロン

ダイトに向けられた。俯いたままで、表情は解らない。

「アロン、どうして答えられないか解るか？」

沈黙するアロンダイトにハスターは言う。

「ハスターは、何を知っているんだ？」

アロンダイトは掠れた声で言う。テレスとダイアも気にはなっていたが、アロンダイトの様子に聞く事が出来ないでいた。

「ハスター、アンタはアレクサンダーに会ったって言ってたよな？その時の話もあたしらは知らなかった。なんでそんなに話たがらないんだい？」

ダイアは腕を組み、問いかける。ぶっきらぼうな言葉と横柄な態度ではあるが、詰問する口調ではない。

「私は、アレクサンダーから家族の話を聞きました。『一番下のやんちゃ坊主』をとて心配なさっておられました」

ハスターは重い口調で話しを始めた。日記の内容を知っているテレスは顔を伏せ、イリアは心配そうな表情をアロンダイトに向ける。

「それから、実父であるランスロットを警戒なさっておられました」

「……なぜ、お爺様を……？」

嫌な予感にアロンダイトは顔を上げ、悲しそうな、辛そうな表情をするハスターを見た。

「ランスロットは野心家だからなのだよ。利用出来る物ならば、実子だろうが使う。そう言う人だとおっしゃってたよ」

「それは、どういう意味、なんだ？」

アロンダイトはハスターが言わんとして居る事に気づき、顔を蒼白にする。

「アレクサンダーはランスロットに利用される事を恐れ、王達に会いに行くと言って旅に出た。アロン、君にはなんと語っていた？」

震えるアロンダイトは、ハスターの問いかけに答えない。

「アロン、しっかりするんだ！」

ハスターは怯えるアロンダイトに喝を入れ、つかつかと近寄る。

「私達は全員君に導かれてここまで来た！ それは事実だ！」

両肩を揺さぶり、ハスターは叱責をあびせる。ダイヤとテレスも同じらしく、ハスターを止めようとしめない。

「お爺様は、父は魔王を倒しに旅に出たと……帰って来れない覚悟を決めて旅に出たと言っていた……」

いつもの真つすぐな眼差しは影を潜め、怯える子供の様にアロンダイトは言葉を紡ぐ。

「俺は……父は……お爺様に殺される、のか？」

「アロン、良いか、良く聞きなさい。ランスロットは君を死なせ、各国から同情を買って事を上手く進めるつもりだ」

ハスターはそれでも真つ直ぐにアロنداイトを見る。幼さ故の脆さ乗り越え、生来の強さと輝きを取り戻せると信じて。

「それが嫌なら、イリアさんと手を結んだ方がより得策だと伝えるんだ。アレクサンダーは説得に失敗した。でも君には私がいる」

アロنداイトはそれでも反応を示さない。

「ハスター」

見兼ねたダイアが口を開く。

「少し時間をやりな。あたしも気持ちに整理つけられないんだ。アロンならもつとだろ？」

「それも、そうか」

ダイアの言葉に頷き、ハスターはアロンから手を離す。力を失い、アロنداイトは人形の様になつくと俯く。

「あんだ……」

ダイアが恐々とイリアに向けて言葉を放つ。イリアはニッコリと笑って振り向き、はい？　と言いたげに首を傾げる。

「ハッキリ言うけど、この日記を全部は信じられない。いや、信じたくはない」

ディアはそれでもキツパリと言う。戦場を駆け回った精悍さが彼女の人となりを表している。

「疑うとはまた違うんだけどよ。この日記が真実だと言う証が欲しいんだ。なんかないかい？」

どこか申し訳なさを含む言葉に、イリアは何度かゆっくりと頷く。ハスターは咎める様な視線を向けるが、イリアの表情を見て何も言わない。

「そうですよね。ふふっ、でも貴女が単純に信じてくれなくてホッとしてました」

クスクス、とからかう様にイリアは笑う。

「テレスさん」

「は、はいっ！」

突然名前を呼ばれ、ジッとアロンドイトを見ていたテレスはハッとして慌て、杖を落とす。

「何をやってんだい？」

慌てて杖を拾うテレスを見てディアは思わず呟く。

「テレスさん、可視幻影を使って頂きたいんですけど、出来ますか？」

慌てるテレスを見て笑いながらイリアは言う。テレスは下級魔術を要望され、目をぱちくりさせる。

「可視幻影……ですか？」

しかも術者の想像した物を見せるだけの魔術であるため、何に使うのが解らない。

「はい。あれにとっておきの道具を使ったら、外部から干渉出来るんですよ」

テレスの表情を見てイリアは説明し、ハスターとテレス、ダイアまでも驚いた顔をしてイリアを見る。そんな事が出来るなどとは今まで考えた事すら無かった。

「ここではそれが出来ませんので、場所を移動しましょうか。アロンドイトさんには辛い物でしょうから、ここにいて下さい」

スツと立ち上がり、イリアは軽く手を叩く。すると、書斎の扉が開き、タキシードを着たコボルトが入って来た。

「お呼びでしょうか？」

うやうやしく頭を下げながらコボルトは言う。

「私達は通信室に行きます。アロンドイトさんの側に居て下さい。あの部屋以外なら、どこでも見せて構いませんし、話しても良いです」

「かしこまりました」

イリアの命にコボルトは再び深々と頭を下げる。

「みなさん。行きましょうか」

ニッコリと微笑み、イリアは三人を案内すべく歩き出す。

テレスは心配そうにアロンドイトを最後まで見ていたが、ダイアに呼ばれて書斎から出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4126p/>

TRUE LEGEND

2010年12月10日14時40分発行